

脱原発世界会議2012@YOKOHAMA セッション報告書

- 企画タイトル B-4「原発も核兵器もない世界へ」
- 日時 2012年1月15日(日) 12:15-14:00
- 場所 3Fホール(301+302)
- 企画参加人数 約600名
- 企画団体 ピースボート
- 文責 大竹更(ピースボート)
- 登壇者
 - フェリシティ・ヒル 豪州緑の党上院議員政策顧問(オーストラリア) ※司会
 - キャスリン・サリバン 軍縮教育家(米国)
 - プラフル・ビドワイ ジャーナリスト(インド)
 - タンヴィール・モカメル 映画監督、作家(バングラデシュ)
 - ムナ・マハメラー 弁護士(ヨルダン)
 - ジャマール・ガッモー ヨルダン国会議員、エネルギー委員長(ヨルダン)
 - ポール・サオケ 核戦争防止国際医師会議(ケニア)
 - 鈴木真奈美 ジャーナリスト(日本)

・企画の中で発表され話し合われたこと

このセッションでは、核時代の中で原子力開発と核兵器開発(核軍備競争)の関連性を露にし、世界各地における原子力開発と核兵器開発に関する動きを、主に南アジア、中東、アフリカ、そして日本の例を元に登壇者が報告した。

核軍縮教育家のキャスリン・サリバン氏は、私たちが愛するもの全てが核の恐怖によって脅かされていることをワークショップ形式で紹介し、参加者は核の恐怖をより身近なものと感じることができた。核兵器や原子力エネルギーに使われるプルトニウムやウランは、恒久的に生命がある全ての生物に害を及ぼす時間を越えた毒であると主張し、愛するものを守りたいと思う私たちの気持ちこそが、核をなくす原動力になるとメッセージを発した。

核兵器開発に意欲的に取り組む国インドが出身のプラフル・ビドワイ氏は、核兵器と原子力エネルギーの関係性において偽善的な主張がされることが多いと指摘した。多くの国は、まず核の平和利用として原子力発電に取り組むが、それは核兵器製造能力を手に入れるに等しく、核兵器に転用される可能性を指摘した。実際に、インドが平和的利用という名目で開発した原子炉を元に核兵器実験を行ったことにもふれ、まずは原子力開発に歯止めをかけることが重要であると訴えた。また、バングラデシュ出身のタンヴィール・モカメル氏は、政府がロシアと原子力協定を結び、バングラデシュ南東にある人口過密地域に原発を建設しようと試みている例を紹介した。周辺住民の生活の源と基盤であるパドマ川の汚染や生態系への悪影響、そして南アジアにおけるパキスタンとインドの核競争に対して懸念を示した。

日本政府が原発輸出を試みている国の一つであるヨルダンからは、弁護士ムナ・マハメラー氏と国会議員のジャマール・ガッモー氏が登壇した。マハメラー氏は、ヨルダン政府は原子力によって目の前のエネルギー資源確保問題の解決を図ることよりも、もっと長期的な視野を持ち、再生可能エネルギーのインフラをつくり始めることが国の責務であると訴えた。その理由として、ヨルダンの水資源の匮乏、中東情勢の不安定さやテロの標的になる可能性などを掲げた。また、同国国会議員でありエネルギー委員長のガッモー氏は、ヨルダンの長い年間日照時間を利用し、太陽光発電などの自然エネルギーに移行すべきだと主張。福島原発事故が起き、ヨルダン国

内での反対派は増え、120人いる国会議員の64人が原発輸入に反対署名を完了させた。自らが国会において原発輸入に歯止めをかけるために積極的な役割を担っていくことを表明した。

ケニア出身のポール・サオケ氏は、アフリカにおける原子力開発の懸念点として、ウラン採掘による健康被害や、核廃棄物処理、コスト面、テロ行為の標的および軍事的利用への転用などを挙げ、特に腐敗や貧困問題が顕著な同地域における原子力開発に警鐘を鳴らした。

日本のジャーナリストの鈴木真奈美氏は、日本人は「核」と「原子力」を別物と考えるように刷り込まれてきているが、「核」も「原子力」も原理、原料、工程は同じであり、核爆弾を作る技術を発電に転用しているだけということ 강조했다。また、衰退しつつある原子力産業を維持するために新しい市場を求めて行われている原子力輸出は、まさに原子力／核産業の延命策（「原子カルネッサンス」）であると論じ、輸出する側と輸入する側の政治・経済・社会を原子力・核のしがらみに縛りつけ、原発と核兵器の終焉を遠のかせると指摘した。

最後に司会のヒル氏が、世界は福島教訓から学び、原発と核兵器は別物だという考えから脱することは可能か、そしてそれを達成するために何が必要かパネリストから意見を頂いたところ、「可能である」、「市民が原発は持続可能ではないことを学び、再生可能エネルギーの可能性を認識することが必要」、「原発を直ちに解体すること」、「人類全てのために脱原発を推進する必要がある」、「原発も核兵器も同じ程度の危険性を持っていることの認識」、「原子力産業の新しい市場を作らせないこと」などの意見が挙がった。

・参加者層、意見や反応など

参加者は主に中高年世代が多いように見受けたが、中には20代や30代の若者も参加していた。普段はあまりワークショップやインタラクティブな形式のセッションに慣れていない人が多いが、セッションの始まりとサリバン氏の登壇中に行われたインタラクティブな場面では、参加者同士の議論や意見の交換が飛び交った。また、登壇者の発言に共鳴する場面も度々あり、拍手があがる時も度々あった。

・当初予定していた目的を達成できたか

企画の目的の一つであった核兵器と原発の関連性を理解することに関しては、様々なパネリストの発表を経て達成できたと感じるが、当初はそれに加えて核の連鎖を断ち切るための方法をパネルディスカッションを通して議論する予定だった。しかし、時間の関係でこの議論を深く行うことはできなかった。

・今後の行動につながりそうな新しいつながり、発見など

「核」は抽象的で私たちから遠い存在に感じるかもしれないが、核は私たちの愛するものや日常生活を全て破壊してしまう脅威であるということを理解すれば、その脅威を阻止するための原動力となる。原発輸出国や輸入国の政府は原発輸出入推進派であっても、その国民は必ずしもそうではない。国境を越えて市民同士が各ケースから学び合い連携し、原子力産業に歯止めをかけることが重要。

・反省点など

今回のセッションでは、1時間45分という時間枠に司会を含め8名の登壇者がおり、1人1人の登壇者に詳細にわたったスピーチをしていただくには時間的観点から難しかった。これだけ様々な地域からお越しいただいたので、登壇者同士でのパネルディスカッションや、そして参加者も巻き込んだディスカッションを行う時間をとることができれば、さらに有意義なセッションになったのではないかと思う。時間の関係から、今後核の連鎖を断ち切るために私たち一人一人が何をできるのか考えるような時間がとれば尚良かったのではないかと思われる。



(写真:水本俊也)